

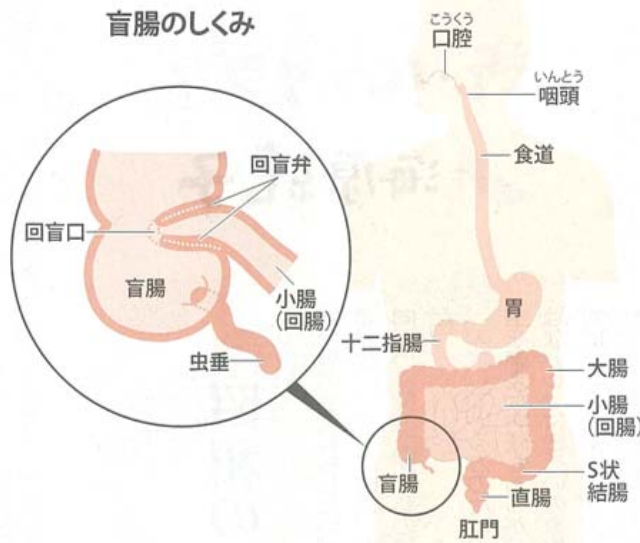
新 真健康論

當瀬規嗣
(札幌医科大学教授)



盲腸は、小腸(回腸)と大腸のつなぎ目のところにあります。実は大腸の一部であり、構造は大腸の他の部分と同じです。ただ、他の部分より膨らんでいて、回腸の方から見る行き止まりのように見えることが、盲腸という名前の由来になっています。

回腸と盲腸のつなぎ目は細く狭まっていて、回盲弁と呼ばれる構造になっています。これは回腸から盲腸に入った内容物が、回腸に逆流するのを防いでいるのです。



腸内細菌

ヒトをはじめとする動物の腸内には、常時、細菌がすみ寄っており、これを腸内細菌という。これらの細菌は通常、ヒトに害を及ぼさず、むしろ病原菌を排除する役割を持っている。また、野菜など植物の消化に関わったり、一部のビタミンを産生したりして、ヒトの生命活動の維持に貢献している。近年の研究では、ある種の腸内細菌が肥満を防いだり、コレステロールを低下させたりして、生活習慣病の予防に役立つとされている。

不要なものではなかった盲腸と虫垂

を防ぐためのものです。回腸と比べ、大腸の中には大腸菌をはじめとする腸内細菌がたくさんすみついていました。腸内細菌は栄養の吸収や、免疫などに重要なはたらきがあることが分かっていますが、これが回腸へどんどん逆流すると、回腸では炎症などのトラブルのもとになるので、それを防いでいるのです。

動物の中で大きな盲腸を持っているので有名なのが、ネズミなどげっ歯目やウサギなどの動物です。大きな盲腸の中にたくさん腸内細菌がいて、特に草などの植物の消化を助けています。げっ歯目はサル祖先にあたる動物ですので、つまり我々ヒトの祖先にあたります。げっ歯目からサル、そしてヒトへ進化する過程で、植物以外の食べものを豊富に手に入れられるようになったので、ヒトでは大きな盲腸を持つ理由がなくなりました。そのため、どんどん小さくなり、盲腸の小さくなった部分が虫垂として盲腸にくっついて存在するようになったのです。

この虫垂に病原菌が入り込んで起こる炎症を虫垂炎といいます。今は抗生物質などで炎症を治めることもできますが、重い場合には手術で取ってしまうことになり、役割を終えて痕跡に残っている上に病気で起こす厄介者ということ、かつては他の理由で開腹手術した時に、病気がない虫垂をついでに取ってしまうこともありました。

ところが、最近、盲腸、とりわけ虫垂の重要な役割が発見されたのです。虫垂の中にはたくさん免疫担当細胞がいますが、この細胞は必要に応じて大腸全体に広がっていくことが分かったのです。つまり、虫垂は大腸の免疫防御機構の司令塔の役割を果たしていたのです。健康な虫垂を取ってしまうと、免疫力が落ちて、大腸が病気になるやくなるのが予想されるのです。盲腸と虫垂は不要なものではなかったのです。

虫垂に関して、日本では不思議なことが起こっています。それは近年、次第に虫垂炎の患者の数が減少しているということ。そういえば、身近で虫垂炎になった人の話を聞かなくなりました。

しかし、まだその原因は明らかではありません。ヒトの免疫のしくみに変化があったのでしょうか？ 良いことではあると思うのですが、何か心配な気がします。取り越し苦労でしょうか……

次週は山口建・静岡県立静岡がんセンター総長の「がんドクトルの人間学」です。

とうせ・のりつぐ 1984年北海道大医学部卒、88年北海道大大学院修了、医学博士。北海道大医学部助手、札幌医科大学医学部助教授、米シンシナティ大助教授を経て、98年から現職。2006～10年、医学部長。専門は生理学・薬理学。